

【課題 1】

前期の授業で学んだ内容について概要をまとめる。

それぞれの項目について、自分が疑問に思ったことをコメントシートの中から取り上げて考察する。

また、特に関心のある事項について、調べたことなども書く。

—

【課題 1】は、下記の構成で回答する。

1. 前期の授業の内容の概要

- a. 言語類型論・系統言語学 (世界の諸言語とその分類)
- b. 社会言語学 (言語の階層と言語選択)
- c. 言語接触 (ピジン・クレオール言語)

・ こちらは、【課題 2】で扱うため、【課題 1】では割愛いたします。

2. 自分が疑問に思ったことを取り上げて考察する a. 国や民族によって「母語」「国語」「公用語」の区切り方

3. 特に関心のある事項について、調べたことを書く

- a. 言語の類型方法について
- b. 現在提唱されている全ての語族

1. 前期の授業の内容の概要

前期の授業では、主に下記の三つの話題が扱われた。

a. 言語類型論・系統言語学 (世界の諸言語とその分類)

1. 言語の数世界には 6000-7000 の言語があるとされている

出展: ethnologue の話者数ランキング

問題点: しかし言語は数を数えられるものではない

2. 言語と方言の違い、variety 「変種」

- 言語の genealogical classification
- proto-language
- phonological correspondence
- cognate vocabulary has regular correspondence
- dialect continuum

b. 社会言語学 (言語の階層と言語選択)

威信 (prestige): ある社会において、ある言語変種に与えられるプラスの評価。

威信には下記の 2 種類が存在する。

顕在的威信 (Overt prestige): 公的な場において「正しい」とされることが遣いに与えられる評価。

- 典型的には「標準語」に与えられる。

潜在的威信 (Covert prestige): 特定のグループ内部で「正しい」とされることが遣いに与えられる評価。

- 変種には通常低い評価が特定集団の独自性・連帯感を強化する。

一般的に、顕在的威信は標準語化に、潜在的威信は方言維持に寄与する。

複数の言語変種が共存している時、言語

- トラッドギル『言語と社会』“Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society”

複数の言語が話される社会では、複数の言語変種が存在し、それらが使い分けられている。

- diaglossia(c.ferguson)
- variety/code
- polyglossia
- 3.1. 国家の言語選択(language policy)
 - ▶ 母語(mother language): 個人が、生まれて最初に習得する言語変種
 - ▶ 公用語(official language): 行政期間が公的なレジストリで用いる言語変種。
 - ▶ 国語(national language): その国を象徴する言語変種
- 3.2. 個人の言語選択(code switching)

c. 言語接触 (ピジン・クレオール言語)

こちらは、【課題 2】にて扱うため、【課題 1】にては割愛いたします。

2. 自分が疑問に思ったことを取り上げて考察する

私が疑問に思ったのは、社会的要素が言語に与える影響だ。

婉曲語法 (Euphemism) : 不快感を与える語や表現を避け、遠回しな表現を用いること。

普及するにつれて、否定的な意味合いが生まれて、さらなる婉曲的な言い換え

- 狭義 (直接言及することがタブー視されている物事に別の語句・表現を用いること)
 - 忌まわしいもの (病気・死)
 - 不浄なもの (排泄)
 - 恐れ多いもの (神)
- 広義

3. 特に関心のある事項について、調べたことを書く

私が特に関心があるのは、言語間の類似度を定量的に表す方法だ。

「すべての言語を一貫した基準で分類できないか」ということだ。

「2.

自分が疑問に思ったことを取り上げて考察する」において言語分類に関する考察を述べた。

系統論と類型論それぞれの

【課題 2】

課題図書のうち一冊を読み、内容をまとめ、自分の考えを書く。

選択した課題図書

『ピジン・クレオール諸語の世界』 西江雅之 白水社 (2020)

選択した課題図書(以下: 本書)の構成

本書は、西江雅之(以下: 著者)が残した二つの主要な連載を、一冊の書籍としてまとめたものである。本書も第一部『『出会い』の言語学』と第二部『『ことば』を追って』に分かれており、それぞれの「部」が一つの連載論文に対応している。どちらも基本的に類似した構成を取っているが、扱う内容や文体には、「部」の間で差異が見られる。

どちらの「部」においても、冒頭で「言語とは何か」といった議論が成された後に、言語接触とピジン・クレオール言語についての考察が述べられている。

両「部」の差異は次のとおりだ。まず第一部では、理論に主軸をおいた論説が書かれている。言語接触に関する一般的な理論・概念的枠組みが、具体例を交えつつ説明されている。それに対し第二部では、抽象的な議論が展開されている。エッセイのような文体で、時折言語学以外の領域に関するテーマも扱いつつ、言語の本質に迫る言説が展開されている。

本レポート(以下: 本稿)の目標

言語接触に関する一般的な理論の全体像を掴むこと。

本稿の構成に関する注意事項

上記の目標を達成するため、本稿の構成は、本書の実際の構成と異なっている。

1. 個別具体的な例に関する記述は割愛する。

下記の2つの章は、個別のピジン・クレオール語の具体的な記述であるため本稿では扱わない。

- ・第一部5章「トク・ピシン語」

- ・第一部11章「ハイチ・クレオール語」

2. 本書の第一部・第二部で重複している箇所は

3.

—

1. 「言語」という概念の脆弱性・問題 下記の通り、「異なる言語」を論ずる前段階で、既に様々な問題をはらんでいることが分かる。1.1. 「異なる言語」とは何か 一般に「〇〇語」と呼ばれる言語でも、1.2. 「言語」内部での差異 もし「〇〇語」という概念が成り立つとすれば、その「〇〇語」内部には、下記の通り主に2つの変種が生まれる。(i) 地域変種 地域によって生まれる、言語内の音声的・語彙的・(稀に)統語的な差異。一般的呼称でいうところの「方言」と一致する。(ii) 状況対応変種 レジストリによって生まれる言語内の差分。日本語や朝鮮語に顕著にみられる「敬語」がこれにあたる。

2. 言語の死と言語の誕生 2.1. 言語の「死」の類型

1. 自然死

2. 突然死

1. 殺戮や自然災害で話者が短期間に全員死亡すること

3. 強要死

4. 選択死

5. 複数死

6. 棚上げ死

7. 曖昧死

2.2. 言語の誕生(異言語接触の帰結) まず、筆者は「異言語が会う」という表現は正確でないと本書の中で指摘している。実際は「異言語の話者どうしが出会い、コミュニケーションが行われる」。そのことを念頭に置いて、下記の通り、異言語接触の帰結の類型を整理する。

a. 言語学的変化が起こらない 本当に何も起きない場合 non-verbal な言語表現に頼る場合

b. 言語学的変化が起こる どちらかの言語に合わせる 別の言語を用いる場合

- lingua franca

新しい言語を用いる場合

1. 手話が形成される場合

2. 混ざり合う①(部分的)

3. 混ざり合う②(両言語が共に構造がかわってしまう)

3. 混成語

まだ社会的に一般化されていない状態

pidginization の開始

4. ピジン語

> 自分の母語と、ピジン語の二言語使用

“pidgin”の語源について “pidgin” の語源は複数考慮されており、未だ定まっていない。

- ポルトガル語 “baixo(低い)”

- ヘブライ語 “pidjom”(交易・物々交換)

- アラワク語 “pidian”

- 中国語訛りの “ocupacao”

- 中国語訛りの “business”

4.1. ピジン語の起源

相手の言語に合わせず、ピジン語が生まれる理由

- 無能者説

- 幼児語説

- 個別並行発達説

- ヨーロッパの方言起源説

- 航海船上発達説

- 単一起源説

- ▶ 語彙再入れ替え説

- バイオ・プログラム説

4.2. ピジン語の発達段階

- jargon(initial pidgen)
- stable pidgin
- expanded pidgen
- declining pidgen

多くのピジン語は消滅

5. クレオール語

母語化を遂げたピジン語: クレオール語

5.1. クレオール語のライフサイクル

1. decreolization 2. recreolization

5.2. クレオール語の類型 basilect: lexifier から最も遠い言語として知覚されるクレオール語

acrolect: クレオール語化の後に現れる lexifier に近い・lexifier の方言のようなものになっている

mesolect: basilect と acrolect の間

lexifier(語彙提供言語): あるクレオール語において、その言語由来の語彙が語源となった語が多い言語

クレオール語をめぐる多言語状況(9, 10 章)

筆者は、第一部の 9, 10 章でそれぞれ、社会的視点(マクロ的視点)、話者視点(ミクロ的視点)からクレオール語を取り巻く多言語環境について述べている。

ピジン・クレオール諸語研究(12 章)

研究史

おしなべて、ピジン・クレオール諸語に関する研究は消極的な初期研究と積極的な二分することができる、と筆者は述べている。初期研究で色濃かったのは、異なる複数の言語が接触すると、そこからそれらの言語が「混ざってしまう」「混乱してしまう」ということに注目するという。そして、多くの場合、その考えは差別的なものであるとしている。その後の研究では、対照的に、ピジン・クレオール語の創出が、人間の新たな可能性として注目され始める。ピジン・クレオール語の形成過程やその使用のあり方に、主体性・創造性・社会的共生性といった人間の能力を見出しているのだという。現代では、「クレオールらしさ」のようなものが研究の話題を占めている。

研究の課題

異言語とは何か 定量的な定義の欠如 「言語」という用語の多義性 (i) (ii) (iii)

研究の分類

—

自分の考えを書く

私の考えとしては、言語接触の結果として生じる言語の用語に関して、より一貫した定義やフレームワークに落とすべきだと考えた。本書の説明では、意味が重複したり、逆に考慮漏れがあると思う。

—